

# 子どもの体験のつながりを大切にした保育

阿部裕之\*，下山恵・北條早織

千葉紅子・高橋文子・渡邊奈穂子・石川幸子・小川恵美子\*\*

\*岩手大学教育学部，\*\*岩手大学教育学部附属幼稚園

(平成27年3月6日受理)

## I 研究の概要

### 1 研究主題について

#### (1) 主題設定の理由

遊びの充実のためには、「幼児が様々な人やものとのかかわりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、心が動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること。」(幼稚園教育要領)が重要となる。

それは、数多くの活動をさせることでも、次々活動を提供することでもない。「幼児が自分で考え、判断し、納得し、行動することを通して生きる力の基礎を身に付けていくためには、むしろ幼児の活動は精選されなければならない。その際特に重要なことは、体験の質である。あることを体験することにより、それが幼児自身の内面の成長につながっていくことこそが大切なのである。」(幼稚園教育要領解説P207)とあるように、幼児の内面の成長につながっていく体験かどうかが重要なのである。

そのためには、一人一人の子どもの体験に目を向け、その子にとっての「体験の意味」を理解し、それがどんな「体験」につながり、内面の成長に結びついていくのかを読み取っていくことが重要だと考える。

一つ一つの体験がつながりをもち、関連し合うことで体験が深まり、遊びが充実していくような保育をめざし、研究主題を「体験のつながりを大切にした保育」と設定した。

#### (2)「子どもの体験のつながりを大切にした保育」

津守真氏は、『子ども学のはじまり』の中で、「幼児の遊びの世界の、人間の精神の発達におけ

る意味を認識しないと、その遊びを中断して、おとなの論理で必要なことを押しつけたり、遊びの場を積極的に備えることを怠ってしまう。」と述べている。まずは、子どもがどのようなことに心を動かしているのかに目を向け、そこに立ち会って、子ども一人一人の体験の意味を理解するということが大切にしたい。

その上で、これまでの体験を生かしながら、新たな体験が生まれたり、様々な体験が結びついて、学びが深まったり広がったりするような保育をつくりだしていきたい。

### 2 研究の目的

体験の意味や体験の関連性を明らかにしながら保育を構想し、子どもの体験が深まり、遊びが充実するような保育をめざす。

### 3 研究の計画

- 1年次：体験の意味やつながりを読み取り、保育を構想、実践し、記録を蓄積する。
- 2年次：収集した記録を蓄積し、教育課程・指導計画の改善につなげる。

### 4 研究の内容と方法

- 子どもの遊びや生活の中の一人一人の体験に目を向けて記録する。
- 記録を体験の意味や体験のつながりを捉えて分析考察する。
- 多様な保育カンファレンスの場を通し、体験の意味やつながりについて理解を深める。

多様な保育カンファレンスの場・  
カンファレンスの考え方

### 学年会

[内容]

・各学年の振り返りと保育の構想

[重点]

- ・子どものエピソードを語り合う。
- ・子どもの体験の意味を読み取る。
- ・子ども理解から保育を構想する。

### 保育内容検討会

[内容]

- ・週案、保育だよりの検討
- ・教材研究

[重点]

- ・週案を検討し、各クラスの保育の状況を理解する。
- ・「保育だより」を検討しながら、各学年の翌月の保育について共通理解する。
- ・歌やリズム、製作、環境等の教材研究をする。

## 何でも語り合える教師同士の関係性 互いに学び合う園の風土

\* 保育後の掃除や環境整備、お茶等の日常の中での何気ない  
会話を大切に

\* こまめな情報交換を

- ・子どもの遊びの状況について
- ・活動や教材について
- ・保護者の情報について

### 研究会・研究保育・事例検討会

[内容]

- ・理論研究（文献、先行研究等）
- ・研究保育（事前研究会、研究保育、事後研究会）
- ・事例検討会

[重点]

- ・文献等を通して、「子どもの体験」、「体験の多様性と関連性」等について理解する。
- ・研究保育では、対象児を時系列に沿って観察・記録する。記録を元に、カンファレンスし、体験の意味や体験の関連性について理解を深める。
- ・体験の意味、体験のつながりを捉えたエピソードを事例にし、カンファレンスする。
- ・カンファレンスの際は、ホワイトボードにキーワード等を示しながら、話し合いの流れを見えやすくする。（板書係は交代で）

- \* 保育カンファレンスは、自分を開き、語り合い、学び合うような教師同士の関係性があるからこそ、有効に機能するといえる。そのためにも、同僚性を高めるよう互いに努力をしていく。
- \* 保育後の時間など日常の何気ない場面の中でも、子どもや保育について話題にしながら、保育の本質が共有されるような風土をつくりだしていく。

## II 実践

### 実践1 4歳児さくら組研究保育

#### ■対象

4歳児さくら組(男12名 女12名 計24名)

#### ■観察場面

それぞれに好きな遊びをしている状況

#### ■ねらい

- ・好きな遊びを見つけたり、友達との触れ合いを楽しんだりする。

#### ■観察の視点

- ・この時期のねらいとなっている「友達との触れ合いを楽しむ」というのはどういう姿なのか、具体的な姿を通して理解する。
- ・友達との触れ合いを通して、それぞれが何を楽しみ、どのようなことを体験しているのかを読み取る。

#### ■カンファレンスから学んだこと

- ・走り回ったりじゃれ合ったりなど、時として教師が止めてしまいがちな遊びの中にも、その時期のその子どもたちにとって意味ある体験である場合がある。子どもたちの遊びが子どもにとってどんな体験になっているか意味を捉え直すことで、教師の見方やかかわり方が変わってくることに気付かされた。



### 実践2 5歳児きく組研究保育

#### ■対象

5歳児きく組(男13名 女10名 計23名)

#### ■観察場面

それぞれに好きな遊びをしている状況

#### ■ねらい

- ・友達とイメージを出し合いながら一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

#### ■観察の視点

- ・対象児4名の関係性を捉える。
- ・それぞれにとっての友達の意味、友達とのかかわりの中で体験していることの意味を捉える。

#### ■カンファレンスから学んだこと

- ・それぞれの子どもの立場からその場面を捉え直すことによって、仲間との関係の間で、楽しい、嬉しいといったプラスの感情体験とともに、悲しかったり、悔しかったり、情けなかったり、嫉妬のような感情の中で揺れ動き、葛藤を抱えながら友達とかかわり、かかわりの中で自分をつくっていく5歳児の内面の複雑さに気付かされた。
- ・一人一人の内面を察して、支え、つなぎ、子ども同士が仲間との関係を築いていけるような援助の重要性を学んだ。



### 実践3 3歳児もも組研究保育

#### ■対象

3歳児もも組(男10名 女10名 計20名)

#### ■観察場面

一日の生活

#### ■ねらい

- ・自分の好きな遊びを見つけて楽しみつっ、友達とのかかわりを楽しもうとする。
- ・色々な素材に触れたり身近な環境にかかわったりする楽しさを味わう。

#### ■観察の視点

- ・ねらいに沿って、幼児の体験の意味や育ちを読み取る。
- ・安心して自分なりの遊びに向かうようになるための教師のかかわりについて考える。

#### ■観察・記録

- ・観察を通して、遊びの中で一人一人が体験していることの意味を捉え、考察する。





「怪獣を倒そう!」という思いで、牛乳パックを切り、真剣にベルトを作っている。自分で考え行動する力がついてきている。自分でやり遂げた思いをもっているようだ。一方で、要所で教師に自分を受け止めてもらいたい思いももっている。

\*本児にとってごっこ遊びの必須アイテムになっていたベルト。毎日繰り返し作る体験が積み重なって、自信となり、自らやりたいことに向かっていく力が育まれてきたのだろう。本児にとっての体験の意味や育ちについて自分とは違った視点からの読み取りで、本児に対する見方を広げることができた。

\*自分で作ることができるような環境が、本児にとって意味のある体験になった。以前は教師が作ったベルトを出していたが、子どもにどんな体験をさせたいかによって、「当たり前」になっている環境を見直す必要を感じた。

ターザンロープに何度も挑戦し、座面に乗ろうとジャンプする動作を何度も繰り返す。自分がやりたいと思うことを自分の力でなんとかやり遂げようとする意志がしっかりと育まれてきている。



興味の対象が次々に変わるように見えたり、脈絡のない行動をしてるように見えたりするが、それは、友達のしていることへの関心だったり、幼稚園での生活を楽しいと感じている故のものだろう。

教師が過剰な声掛けをしていないこと、穏やかにかかわっていることは学ぶべきところだと感じた。

\*本児のことを「遊びを転々としている」と捉えているところがあった。しかし視点を変わるとこのように捉えられることがわかり、肯定的なまなざしで見ていなかったことを反省させられた。

「誰もいない他のクラスに行き風呂敷を探す」ということ自体が遊びになり、一緒に動くこと、ドキドキ感を楽しんでいた。

友達の動きや言葉に呼应しながら遊び、楽しんでいる。

偶然起きる出来事、友達や教師の楽しそうな動きや雰囲気などが心を揺り動かしている。



\*実際に自分もこの場面にかかわり、心が弾んでいることを感じた。偶然の出来事から遊びが生まれ、子どもたちにとって面白く、意味ある体験になっていくと感じた。

手をつないだり体を寄せ合ったりして、一緒にいたい友達ができていることが伺える。

気持ちのすれ違いや小さなぶつかり合いはありながらも、友達とのつながりが芽生えてきている。



先生に信頼を寄せ、先生とのつながりを求めて周りに集まってくる姿が見られた。

その一方で、子どもの発するイメージを受け止め、返すことは大事だが、先生とのやりとりになっていないか。もっとゆったりと、子どもたちがじっくりと環境にかかわり、様々な発見をして自分の世界を広げていくような経験をたっぷりできるようにしていく必要がある。

“自分で” “自分たちで” 考えたり行動したりつながっていく楽しさを感じているようなので、子どもたちなりの動きやつながり、楽しもうとしていることを感じ、見守るような間合いも大事にしたい。

\*自分の保育課題を感じ大分意識して保育していたのだが、  
まだまだだったことを痛感させられた。確かに、「何かしなければ」「何とかしなければ」という思いがあり、いつもバタバタとしていたり、教師ばかりが話していたりしたかもしれない。

#### ■カンファレンスから学んだこと

- ・担任の保育の傾向や問題と感じていることを視点として、複数の目で保育を観察し、子どもたちが何を体験しているか捉えることで、担任自身が自らの保育を変容させていくきっかけになった。

### 実践4 たんぽぽ組研究保育

#### ■対象

5歳児たんぽぽ組(男10名 女9名 計19名)

#### ■観察場面

節分の柀作り

#### ■ねらい

- ・教師から投げかけられた課題を自分の課題として受け止め、興味をもって取り組もうとする。

#### ■観察の視点

- ・これまでの体験のつながりという視点から幼児の育ちと課題を捉え、今後どのように体験をつなげていくか考える。
- ・育ちや課題に即した環境や活動について探る。

#### ■カンファレンスから学んだこと

- ・体験の意味は子どもの内面の問題であり、一つの活動を通して体験している中味は、一人一人異なる。「体験のつながり」と「活動のつながり」は同一ではなく、一人一人にとっての意味を読み取っていくことが大切である。
- ・体験はその場ですぐに意味あるものとして表れるだけでなく、幼児の中に溜め込まれ、時を経て意味あるものとして表れてくることもある。



## 実践5 つばき組研究保育

### ■対象

4歳児つばき組(男13名 女11名 計24名)

### ■観察場面

劇遊び「おだんごパン」

### ■ねらい

- ・相手の動きを意識しながら友達との遊びを楽しむ。
- ・学級のみんなと一緒に、お話のストーリーに沿って表現する楽しさを味わう。

### ■観察の視点

- ・活動が子どもにとってどのような意味があり、どのようにつながっているのかを探る。
- ・体験のつながりを意識した活動、援助の在り方を探る。

### ■カンファレンスから学んだこと

- ・遊びの中で自然と繰り広げられている、友達とのやりとりや自分を表現していく体験の積み重ねが、学級全体での劇遊びのような活動を楽しむことにもつながってくる。
- ・幼児が今どんな育ちなのか、何を楽しんでいるのか、どんな思いでいるのかなどを捉えた上で、育てていきたいことなど教師の願いも併せて、保育を構想していくことが必要である。
- ・「おだんごパン」のお話は繰り返しのところが安心であり、楽しいところである。ストーリーの楽しさを味わえるようにし、子どもが自然と表現したくなるようなところを劇遊びとして表現していく。



## Ⅲ 今後の研究に向けて

### ○ 体験を捉える視点「人」「もの・こと」

遊びは多様な人・もの・こととのかかわりから生み出される。体験の意味は、多様な視点から捉える必要があるが、主に人とのかかわりの

視点から話し合うことが多かった。ふさわしい「もの・こと」とのかかわりが、遊びの充実、子どもの変容、人間関係の変化につながることもある。「もの・こと」とのかかわりを通して体験の意味を深く理解しながら心動かされるような環境との出会いをつくりだしていきたい。

### ○ 体験の捉えは、過去から現在、そして未来へ

体験のつながりを過去からの視点でとらえることが多かった。この体験が次の体験へとどのようにつながっていくのかという視点をもって環境や援助の可能性を探っていきたい。

### ○ 遊びの充実につながる保育の振り返りと記録

子どもの遊びの充実につなげていくために、遊びの状況に沿って、どうかかわればよかったのか、どのような援助が考えられるか、教師の居方はどうあればよいか等、より具体的にしていく必要がある。そのための保育の振り返りと記録の在り方はどうあればよいか探っていききたい。

### ○ 発達過程の理解

各年齢や時期の発達の過程をより深く理解し、それに合った環境を用意し、援助していくことが必要である。

## 引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』(平成20年)
- 2) 榎沢良彦「体験の多様性と関連性を重視した指導」文部科学省『初等教育資料』(平成25年12月号)
- 3) 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎『今日から明日へつながる保育—体験の多様性・関連性をめざした保育の実践と理論—』萌文書林
- 4) 津守真『子ども学のはじまり』フレーベル館
- 5) 佐伯胖他『子どもを「人間」として見るということ 子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房